

事

仕

の

治

安

森

花

3学期もあっという間に半分がすぎました。体調を崩したりはしていませんか？
現在、六甲アイランドの神戸ゆかりの美術館で「花森安治『暮しの手帖』の絵と神戸」展が開催中。現在も発行されている雑誌「暮しの手帖」の初代編集長が花森安治さんです。戦後まもない1948年、二度と戦争を起こさせないために、くらしを大切に作る世の中になろうと創刊されました。「編集長」から想像される仕事量を超えて、文筆、イラスト、デザイン、装丁などマルチな才能を発揮。花森さんは神戸市出身でありながら、今まで本格的な展覧会はされておらず、今回やっと！彼が描いた「暮しの手帖」の表紙画や、誌面記事を200点ほど展示しているそうですよ

そんな花森さんの神戸にまつわるエピソードが紹介されている『花森安治の仕事』。彼が亡くなった10年後に出版されました。著者は、朝日新聞編集委員だった酒井寛さん。「暮しの手帖」研究室に入りこんで、入念な取材をもとに花森安治のしごとを批評しました。神戸三中時代（1年上には淀川長治さんがいたそうです）のこと、社会人になってからも週刊朝日の編集長らと「バラケツ会」という集まりをしていたこと、宝塚ファンだったこと…。なかでも、神戸三中を卒業後、1年間浪人したときのエピソードが印象的です。

その1年間、花森は、神戸の山手の大倉山にあった市立図書館に通った。図書館からは港がよく見え、窓があいっていると、汽笛がきこえた。（中略）閲覧室では、持ってきた教科書が参考書を読み、それにあきると、図書館から借りた本をひろげた。そのひとつが、平塚らいてうの『円窓』だった。

終戦の年の秋、女性のための出版の志を持った大橋鎮子と出会い、創刊以来30年にわたって『暮しの手帖』を作り続けた彼の原点がここにあるのかもしれない。

いつだったか、花森は大橋に、こうも言ったことがある。ぼくは年をとったら、神戸に帰りたい。六甲山にアトリエを建てて、そこで絵を描いているから、君はみんなの原稿を持って、神戸までくればいい。神戸は、花森の生まれ育った町だった。神戸が好きだった。初期の表紙には、ランプやチェストなど、西洋小道具をよく描いた。

頑固で、こだわりが強く、癩癩持ちで、職人で、天才で…周囲の人にそう言わしめた彼の魅力の土壌に神戸の風景があったとしたら。私が一番ぐっときたのは、

美しいものは、いつの世でもお金やヒマとは関係がない　みがかれた感覚と、まいにちの暮らしへの、しつかりした眼と、そして絶えず努力する手だけが、一番うつくしいものを、いつも作り上げる

という文章でした。敗戦後、新しい暮らしについて考え、身近な衣食住を大事にし、よいものとそうでないものを自分で考えることの大切さを提案してきた『暮しの手帖』。図書館にもあるので、ぜひ読んでみてくださいね

花森安治

1911年、神戸市須磨区で貿易商の父と小学校教師の母の長男として生まれる。中学卒業後は、旧制松江高校を経て東京帝国大学文学部美学美術史学科に入学。1935年、学生結婚し、1937年に大学を卒業、長女が誕生。秋に招集を受けて旧満州へ赴任。除隊後は大政翼賛会の宣伝部に勤務。1946年に大橋鎮子らと衣装研究所を設立。『暮しの手帖』の前身となる『スタイルブック』を刊行。その2年後に『美しい暮しの手帖』を創刊。編集長として『暮しの手帖』152冊を世に送り出した。1978年、心筋梗塞により永眠。